

1



1 発掘調査当時の様子。中央広場を取り囲むように軸線^{たて}を向けて、大型の竪穴住居が並ぶ。縄文時代中期に発展する環状集落への成長段階が分かる遺跡として、大清水上遺跡は重要な意味を持つ（写真は（公財）岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センターより提供）

2 出土した大木5式土器。ラップ状に開く口縁部、粘土を貼り付けて作ったW字形や円形の模様が特徴

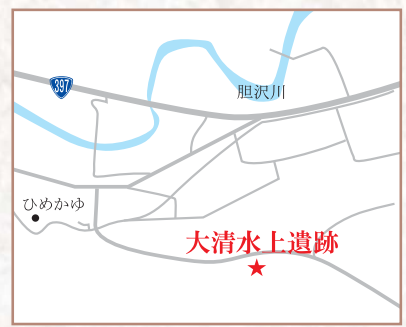
3 復元した広場。この広場の周りに住居が建ち並んでいた。木立の向こうには、焼石岳や胆沢ダムを望むことができる



2



3



奥州遺産

— ときを越え

受け継がれるもの —

第118回

大清水上遺跡

胆沢若柳字慶存^{けいぞん}Ⅱ

胆沢扇状地の要部分^{かなめ}に当たる、標高280[㍎]の台地に大清水上遺跡はある。胆沢ダム建設工事の際に発掘調査が行われ、長さ10[㍎]を超す大型住居が、円環状に整然と並ぶ集落跡が見つかった。

出土した土器の特徴から、今からおよそ5千年前の縄文時代前期後半ごろの集落跡と考えられている。出土遺物には、宮城県北や秋田県の遺跡から見つかっている遺物と同類のものがあつた、これらの地域と交流があつたことを物語る。

遺跡は調査後、遺構保護のため埋め戻され、現地は見渡す限りの草原になっている。遺跡の環境整備を行っている「大清水上遺跡をサポートする会」が復元した広場が、唯一当時をしのばせる。

大清水上遺跡は、北上川中流域の縄文文化研究、ひいては東日本の環状集落の形成過程を考える上で、貴重な学術的価値を持つ遺跡であるという理由で、平成20年、国史跡に指定されている。

広 告

●広告の問い合わせは、(株)東広社（☎ 0197-64-1523）